The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	自己意識のオントロギー : 意義の不幸と欲望
Author(s)	甲田, 純生
Citation	カンティアーナ. 1992, 23, p. 80-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66708
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

一九九一年度修士論文要旨

自己意識のオントロギー
――意識の不幸と欲望――

甲田純生

「欲望」というのは、現代でこそ様々な思想のなかで重要なモチーフとなってはいるが、西洋哲学の歴史を振り返ってみるならば、哲学的思索のメインテーマとして大きく取り上げられることはあまりなかった。欲望に対して、哲学体系の中のある位置を初めて与えたのはヘーゲルであろう。しかも欲望は、彼の主著である『精神現象学』の中の「自己意識」の章の中核をなしている。人間の欲望は動物的欲求といかに区別されるのか。その答えは、人間が意識をもった存在者である、ということのうちにある。では意識とは何なのか。

例えば、「私」が机を見ている、という状況を考えてみよう。この机は眼球の網膜上に像を結び、それが神経系を通って脳内に像を作る。では何故「机」は「私」のうちにあるものとして認識されず、「私」の外にあるものとして認識されるのか。この奇態を可能にするのが「意識」の働きに他ならない。すなわち意識とは「対象化の作用」である。動物はこのような対象化の働きをもたないがために、そこでは自我も対象も存在しない、と言える。

さて、意識の対象化作用は、単に自分の外のみならず、自分の内に対しても機能する。後者の場合が「自己の対象化」すなわち自己認識である。一般に自己意識というのは、この意味でのみ捉えられることが多い。が、意識の働きによって動物的欲求は破壊され、人間的欲望へと変貌する。これこそが自己意識の本体をなすのである。

動物的欲求とは、己れの生命体を維持せんとする衝動であり、一般に「本能」と呼ばれているものである。そこでは、先にみたように、自我も対象もない。生命を維持しようとする衝動のみが存在する。が、人間は意識を獲得することで、自我と対象とに分裂してしまった。このことによって、動物的欲求はある歪みを被る。単に生命を維持しようとする衝動であった本能が、「自己の外にある対象を否定する威力」という意味を帯びる。それだけではない。動物はそれぞれ、本能によって分節された固有の世界＝環境世界をもっている。動物は、自分の生命を維持するために必要なものとのみ関わるように、自分の世界を構成しているのである。ある生命体にとって必要でも有害でもないものは、その生命体にとっては存在していない。このように動物の環境世界はある種の凹凸をともなって構成されて

いる。が、人間の意識は、対象化という魔法でもって、この凹凸を一様にならしてしまうのである。これこそが我々の認識する世界に他ならない。それはもはや、「本能」によって構成された世界ではないのである。

以上のような欲望によって、自己意識の本体が形成される。欲望は「自己の外にある対象を否定する威力」であったが、この否定を通して、自己は自分の存在を確信するのである。この「対象の否定」はふつう「行為」を伴う。すなわち、欲望は行為を介して満足へと至る。そしてこの満足の中で、自己は自分自身の存在を確信するのであるが、このとき確信される自我というのは、個別的なものである。例えば、机を見るといった認識的行為においては、見る主体である「私」＝自我は、特に固有な存在者としては現れてはこない。つまり自我は、単なる認識主体としては、普遍的（一般的）なものにとどまるのである。しかし一般に自己意識とは、「自己が、他のなにものでもない、かけがえのない自己である」という意識である。このような、自己の個別性についての意識というのは、「欲望」によって初めて生じるのである。つまり、欲望こそが自我を「個別的なもの」として開示するのである。このように、「個別的な自己の存在を確信している意識」こそが自己意識の本来の姿であるのだから、自己意識は、実は欲望にその基盤をもつと言うことができる。

ところが、自己意識は本来、さらに別のモメントを必要とするのである。つまり、単に物を食べたり破壊したりといった、物に対する否定的行為のみでは、自我は十分な自己確信には至らないのである。それは、人間の意識というものが、そもそも他人との関係の中で生じてくるものである、ということに起因する。つまり我々人間は、他の人間から認められたときに、完全な自己確信に達することができるのである。したがって、自己意識というのは、決して自己完結的なものではなく、常に他者の存在を必要とする。人間が社会的動物である、と言われるゆえんである。他者との承認関係においてのみ、自己意識は真に自己意識たりえるのであり、人間は真に人間たりえるのである。

以上のことから、人間の意識＝対象化作用が動物的欲求を人間的欲望へと変貌せしめ、この欲望によって自己意識が形成される、ということが明らかにされた。これらはすべて、人間が意識的存在者であることの帰結であった。が、一方では人間の意識は、欲望というベクトルとは逆向きのベクトルをも産みだすのである。人間の意識は、一切のものを対象化する「超越的威力」である。それは自らの生や死までをも対象化する。人間だけが「自分が死すべき存在であること」を知っている。そして人間だけが、死を前にして「恐怖」を感じるのである。「死にたいする恐怖」というのは、人間に特有のものである。それは、人間存在の深淵を形づくる重要なモメントである。死の恐怖を感じた人間が、死を前にして取る態度が「禁止（タブー）」

である。つまり、死を恐怖した人間は、死を己れから遠ざけるために、暴力・侵犯を忌まわしいものとして退けるのである。これは、「他者を否定する威力」である欲望の排除を意味する。しかし、欲望は排除・抑圧されて消滅するわけでない。欲望の抑圧＝禁止（タブー）に対して、逆に欲望は「禁止の違反・侵犯」という意味を帯びる。これこそがエロティシズムの本質に他ならない。つまり、欲望が「死の恐怖」を体験し、それによって抑圧を被ることで、逆に「禁止の違反」という意味を帯び、そのことが人間の欲望をエロティシズムとして成立させるのである。人間は意識を獲得することで、自己の内部に、欲望と欲望の抑圧という、二つの相反するベクトルを産みだした。この対立の間から立ち現れるものこそ、エロティシズムに他ならない。この二つのベクトルの対立・緊張関係が、人間の存在を形成しているものなのである。そしてここから、人間の様々なイデオロギー形態が産みだされてくる。

欲望とは自己意識の本体であり、それは自我の個別性を開示するものであった。したがって逆に、「欲望の抑圧」というベクトルは、普遍的なものを目指す。それは、欲望との闘争である。それは、歴史上、禁欲主義として現れたり、人間の思惟の自由を謳歌する「懐疑主義」として開花したりする。つまり、欲望の抑圧というベクトルは、その副産物として「自由」のイデオロギーの萌芽を産む。が、この自由は、人間の一面を無視したところに成立する抽象的なものにすぎないために、不十分なものにとどまる。それは、欲望の自己主張の前に、あえなく敗北するのである。欲望を抑圧しようとするベクトルは、いつも欲望の側からの反逆に出会う。この闘争の行きつく先は、ヘーゲルによれば、罪の意識なのである。欲望は、いくら抑圧しようとも滅びることはない。欲望こそ自己意識の本体なのであるから、人間が自己意識的存在であるかぎり、この二つのベクトルの対立関係は消えることはない。が、死の恐怖を体験した人間は、己れの個別的存在から離れて、普遍者に至ろうとする。が、それでも欲望を滅却しえぬことを自覚したとき、罪の意識が生じるのである。もちろん、これは宗教の萌芽的形態である。罪の意識は、己れの罪の赦しを請うために、赦す主体としての神を創造する。そして、世界を彼岸と此岸に分割し、彼岸において救済されることを目指す。しかしこれは、自我の分裂が、彼岸と此岸という分裂に形を変えただけのことである。罪を赦す主体である普遍者すなわち「神」はむこう側に立ち、罪を赦される意識のほうは、個別的なものとして、いつまでもこちらがわに残される。

もう一度繰り返すならば、人間は意識を獲得したが、この結果として「欲望」と「欲望の抑圧」という相反する二つのベクトルを自己のうちに生ぜしめた。この対立は決して解消されはしない。これが「意識の不幸」なのである。そして、この対立・緊張関係こそが、人間の意識的存在を形づくるのであるから、この「意識の不幸」は、我々人間の根源的不幸なのである。